

【見えざる敵は、どこに潜んでいるのか？ー】 [迫り来る法改正と時代変化の荒波-59]

<[SMGレポート 3101 序文> 一見すると、誰も正面切って批判出来そうにない理由を並べ立て、マスメディアを使って事務的且つ一方的に、ある事実、ある結論だけを伝えるーという報道の仕方或いはさせ方は、云うまでもなく、支配し統制する側が、昔から使って来た常套手段ではないかと思えます。

最近の出来事でいえば、**大手コンビニが、ほぼ一斉に成人向け雑誌の販売を打ち切る、というニュース**がその一例です。コンビニ側は、ラグビーのワールドカップや東京オリ・パラリンピックの開催により、**外国人観光客の増大が見込まれる中、対日イメージの低下の一因となりかねない**と云う懸念や、**客層がファミリー中心**に変わり、男性サラリーマンが相対的に減少している事等を、その主な理由として挙げている様です。アダルト系の雑誌類が、人目につきやすい店舗入り口付近の棚に陳列されていると、**日本の文化度を疑われるだけでなく、子供への悪影響や女性客の輦感を買いかねない、とする販売中止理由**には、声を上げて反論し難いものがあり、歓迎する向きも少なくないのが実情でしょう。又、ME-T00 運動に見られる様に、セクハラ問題が裁判沙汰となる例も珍しくなく、法令化も間近とされる状況下では、**先験的に男性優先とする社会観が最早成り立たない**としても、それはそれで結構な事かと思ってしまう。

けれども、このテーマの本質は、表層を捲った更にその下に、二層になって隠れている出版流通業界が舞台の歪な構図であり、その一層目にあるのが、**圧倒的な販売網を有する事業者によって牛耳られている、圧倒的力関係**なのです。

特にコンビニの場合は、全国ベースで現在、5万数千店が展開されており、一部地域を除き、津々浦々に販売網が張り巡らされている、と言っても決して過言ではない状況にあります。つまりこれは、この流通ルートに載せる事が出来さえすれば、その商品は、一店舗当り一点の売上げだと仮定しても、総売上5万数千点になる、という事を意味しています。見方を変えると、一方でそれは、出版界の川下に当たる**販売業者の一存で、出版社や作者までもが支配され、淘汰されかねない**という事であり、民法でいう「優越的地位の濫用」も十分起こり得る事態である、とさえ云えるのです。**市場での圧倒的力関係は、出版物自体の社会的存在意義や言論・出版の自由さえ抹殺してしまう恐れすら孕んでおり、健全性の良否以前の大問題**なのです。

そして、更に二層目に目を転じてみると、課題の本質がより一層鮮明になってきます。販売中止対象となっている出版業者は、軒並み小規模零細事業者であり、作者も個人事業者そのものです。**大企業・大資本が母体のコンビニによる市場の支配・寡占と弱小業者の駆逐**という、この典型的構図を糸口に、本号では、大手業者による各分野の、市場支配の実態に迫って見たいと思えます。